



従容録に学ぶ (四二)

第八六則 臨濟大悟

〔示 衆〕

衆に示して云く、銅頭鉄額にて天眼龍睛、彫髻に魚頰、熊心豹胆なるも、金剛剣の下には是れ計いも納さず、一籌の獲もなし。為甚麼で此の如なるや？

〔本 則〕

挙す、臨濟、黄檗に問う、「如何なるか是れ仏法的の大意？」（殺人は怒すべくも、情理は容し難し）。檗、便ち打つ（棒棒に血を見る）。是の如く三度にて、乃で檗を辞して大愚に見ゆ（重きを便とし、軽きを便とせず）。愚、問う、「甚麼処より来る？」（険しいぞ、照顧よ）。濟、云く、「黄檗より来る」（杖瘡が猶在り）。愚、云く、「黄檗に何の言句ありし？」（這裏は響を報つに好し）。濟、云く、「某甲、三たび仏法的大意を問うに三度棒を喫えり。不知、過ありや過なしや？」（更だ六十棒を少けり）。

愚、云く、「黄檗は甚麼に老婆にて、爾が為に微困と得らん、更に來つて有過無過を問う？」（再と犯は容さじ）。濟、言下に大悟す（始めて痛痒を知れり）。

久しぶりに臨濟さまの則で、第一八号で『従容録』第三七則「臨濟真人」を拜読して以来です。これらのほかにも、まだ第一三則「臨濟瞎驢」と第九五則「臨濟一画」の二則があるのはさすがです。

臨濟義玄（\*）八六七）については、すでに第一八号で紹介しましたので再説はしません、とにかく一匹オカミの禅匠たちがゴロ／＼出た唐宋の時代に、特に二人を挙げれば臨濟と洞山といわれるほど、大物中の大物です。両者はほぼ同時期の人で、臨濟は鎮州（河北省石家莊市）臨濟院という平地寺院で峻烈な化導を振り、洞山は江西省の大変な山中で幽玄な宗風を掲げました。このように、両者は環境も禅風もきわめて対照的ながら互いに意識していたと考えられますが、なぜか二人の交渉は知られていません。



さて、この「臨濟大悟」の機縁は古来有名な古則とされ、『碧巖

録』第一一則にもとりあげられています。まず万松の「示衆」は、ハナからおそろしい語句の羅列です。そして、そんなすごい鉄漢も金剛剣(黄檗の棒)には手も足も出なかつたのはなぜか?と迫ります。黄檗とは江西省黄檗山の主、希運禪師その人。宰相の裴休はいしゅうも参じた名徳で、臨済はここで鉗鎚かんすいを受けたのです。

つまり、臨済が黄檗に「仏法のギリギリの根本義」を問い、打たれ、三度繰り返し返したのち、高安(江西省北部)の大愚和尚に参じ、前事を告げた。すると大愚は、黄檗の親切さをほめそやした、そのトタンに臨済は大悟徹底した、というあらずじ。もとより、細かな状況は一切省かれているため、話の筋は簡単ですが、その背景や過程には大量の氷山底辺が隠されているものです。なお、大愚は馬祖―帰宗―大愚と承ける人で、馬祖―百丈―黄檗の系譜とは近い関係にあります。本機縁からも知られるように、増当の人物でした。

ところで、この「本則」の語句につけられ

た万松さんのコメントは、みなズバリズバリときまり、小気味よいですね。「仏法ギリギリの根本義」なる問いには「殺人罪でも世間では許されても、仏法世界では人間的な理屈も通らんぞ」とか、黄檗の棒打には「一棒一棒慈悲の血が流れている」と高く買い、臨済が大愚に参じたのを「簡単に埒があくと思つたら実はまったく逆」と風刺し、また「六十



風外本高画「臨濟一喝」

(函館龍宝寺蔵)

棒を少く」とは「そんなふうなら三棒どころか六〇棒でもよかつた」と、大いに黄檗の棒打の意義を掲げるなど、見事なものです。つまり、この一則の核心は黄檗の棒打と大愚の力量なのです。今日、棒打などという動物に対してすら暴力だ虐待だとたいへんですが、むかしの禅道場ではごく当り前のこと。

師による慈悲の鞭で、それによって人物が生まれた、文字通り「人材の打出」でした。

今ここでは、「仏法の根本義」などは言葉の表現をこえている、アタマで理解してはならん、打たれたら痛いはず、その痛さは何だ、どこから来る、そのいのちの根源がわかれば仏法の極則だ、とでもいうのでありましょう。だからこそ、老婆親切だといふのですね。コメントの「棒の痛み」とは、黄檗の大親切を表現しているのです。かくて、大人物の誕生には黄檗と大愚による必死の大慈悲があつたのです。

こうしてみると、飛躍した例ながら、坐禅中に警策を受けるのも悪くはないですね。睡りをさますクスリであると同時に、痛さというおのれのいのちのありかを知るよすがです。私は学生時代、沢木興道老師ご指導の坐禅が必修科目。老師の前の単に坐り、毎週老師から連策の一本をいただきました。当時はイヤとしか思わなかつたのは若さの至りでお恥しい限り。今にして憶えば、じつは得難い体験だったので。永平寺では、年間を通じて罰策は一本だけ。どうやら、あまりまじめに坐るのもよしあしかもしれません。とまれ、足や肩の痛みは大切なことなのです。

## 第二五回成道会円成す！

去る一二月二日、報恩感謝の坐禅を二炷行じた後、お釈迦様がお悟りを開かれたことを記念して、椎名老師のお導きのもとに「成道会」が厳粛に執り行なわれました。参加者は



成道会参加の梅花講・参禅会会員

参禅会会員二九名、梅花講員一名、合わせて四〇名でした。

成道会は、梅花講員による「聖釈迦如来成道御和讃」の奉詠から開始されました。法要の後は、恒例となった「問答」です。ベテラン会員に新人会員も加わって、熱気あふれる問答が繰り広げられました。問答の内容は、仏教の教え、日常生活の問題、修行のあり方等、在家修行者らしく千差万別でした。

はるか二五〇〇年前に偉大な教えを打ち立てられた釈尊に思いを馳せているうちに、成道会は早や終了となりました。

続いて椎名老師より「法話」を賜りました。以下に法話要旨を記述いたします。

本日は、金沢大乘寺の四三代住職をお勤めになられた無学愚禪（一七二三年生―一八〇九年没）という、珍しい方の話しです。

誕生の地は武蔵の国吉見村（現在の鴻巣市・東松山周辺）です。幼名は不明ですが、まじめな子供で、一四歳で出家しました。当時、貧しい農民は家族の口減らしや、子供の教育の手段として、出家させることが少なくなかったのです。興長寺の痴天老師のもとで出家し、八年間修行をしました。

その後、富山の光禅寺へ行く旅の途中、福

井県の東尋坊で海に落ちたのですが、泳ぎができず、意識不明のまま海岸に打ち上げられたところを住民に発見され、奇跡的に一命を救われことができました。

さらに下関市の功山寺に移り、高釣和尚の下で遂に大悟徹底したのです。「啐啄同時」の如く（師と弟子の意気が合い一体不離になる）高いレベルでの悟りであったと言われています。

『禅と弓』（オイゲル・ヘリゲル著）には、初心者当時のヘリゲルが、弓道の極意を体得したときの話しが出ています。師の射った一の矢が的の中央に的、次の二の矢は一の矢の矢尻に当たった。どうしてあのように正確に当たるのかとの質問に対し、師の阿波研造は「自分が射っているのではない、あれが射っているのだ」と答えています。

痴天老師から印可証明をもらった愚禪和尚は、興長寺で二七年間住職を勤めました。五七歳の時、大乘寺の住職となりました。住職になるとすぐ、無造作に置かれていた寺宝を整理し、宝物殿を作って安置することにしました。

この頃、永平寺が修業に関する規則を作り、全国の系列寺院に遵守するよう指示を出した

ことを契機として、永平寺と揉めることとなりました。大乘寺ではすでに様式が整っていたので、頑として納得せず、遂に愚禪和尚は住職を辞めてしまったのです。しかし、前田家の家老の仲介によって、二代後に、再び住職に復帰し永平寺と和解をしました。

愚禪和尚の教えは分りやすいと評判だったので、あちこちの授戒会に招かれることが多く、戒弟は何万人にも及んだそうです。文政一九年に愚禪和尚は九七歳という高齢で亡くなられました。

椎名老師は数年前に偶然、愚禪和尚が讚を書いた狩野探幽の弁天像の掛け軸を入手されました。成道会の良き日に、龍泉院様の寺宝であるこのような画を拝見することができ、大変幸せだと思います。

茶話会では、今年一年を振り返っての反省や、来年にかける意気込みが多く聞かれました。最後に、今年も龍泉院様より宗門の美麗なカレンダーを頂戴いたしました。只管感謝。

(記録・杉浦上太郎)



## 「永平寺宮崎貫首が我々に残されたメッセージ」

我孫子市 清水 秀男

今年数え年で一〇八歳の茶寿を迎えられた永平寺貫首の宮崎奕保（えきはま）老師が、一月五日ご遷化されました。老師は、道元禪師の只管打坐の教えを厳格に守り、修行僧より早く午前三時前からの坐禅を欠かさず、身をもって禅とは何か、修行とは何かを説かれると共に、ご高齢にもかかわらず、精力的に全国各地を巡回され法を説かれ、全身全霊をささげて禅を弘められた現代の傑僧でした。龍泉院でいつも椎名老師のご提唱を拝聴する部屋に、宮崎老師が揮毫された「只管打坐」の色紙が掛っているのを、覚えておられる方も多いと思います。

最期のご様子について、朝日新聞一月二五日付夕刊の惜別欄では、次の様に伝えてあります。「病室に付き添った二人の雲水が、明け方の短い一声で枕元へ駆け寄ると、息を引き取っていたという。あれは、『おーい』と呼ぶ声であったか。何か掛け声であったか。永遠に分らない」と。

私はこの短い一声が禅僧らしい最後のご説

法だったような感がします。そして、そのご説法の内容の手がかりを、約三年半前の平成一六年六月一三日NHKスペシャル番組での宮崎老師の特集「永平寺一〇四歳の禪師」に求めてみました。その中で語られた数々の教えは、まさに老師が我々に残された遺言だったと思われてなりません。その中からエッセンスを取り上げて味わってみたいと思います。

### 「坐禅とは」

道元禪師はおっしゃっておるんや。「坐禅をすれば善き人となる」。その善き人になかなかなれん。人間は名誉とか地位とか見栄とか我慢（わがまま）とかそんなもので一杯だ。欲を克服するすべを覚えんといかん。それが坐禅だ。

### 「坐禅の要諦とは」

坐禅する時、何にも考えない。妄想せんことや。いわゆる前後裁断や。その時その時、一息一息しかないんだ。何か考えたら、もうそれは余分や。息と一つになる。欲の起こる隙がない。坐禅ということは真つ直ぐということや。真つ直ぐというのは背骨を真つ直ぐ、背筋を真つ直ぐ、右にも傾かない、左にも傾かない。真つ直ぐということは正直ということや。身心一如やから体を真つ直ぐしたら、



心も真っ直ぐになつとる。

### 「日常生活がそのまま坐禅」

道元禪師の坐禅ということは、すべてがみな坐禅だ。坐禅といったら何か殊更にあるように思っておる。そうではなくて、そのものとなつていくことが坐禅だから、歩いたら歩いた坐禅、しゃべったらしゃべったで、しゃべることが坐禅だ。

スリッパを脱ぐのも坐禅の姿や。スリッパを揃えるのが当り前のこつちや。例えばスリッパがゆがんでおつたら、放っておけないんだ。スリッパがゆがんでおるといふことは、自分がゆがんでおるんだ。

### 「大自然と真理について」

自然は立派やね。私は日記をつけておるけれども、何月何日に花が咲いた。何月何日に虫が鳴いた。ほとんど違わない。規則正しい。そういうのが法だ。法になつたのが大自然だ。法になつておる、だから自然の法則をまねて人間が暮らす。人間の欲望に従つては迷いの世界だ。真理を黙って実行するというのが大自然だ。誰に褒められるということも思わんし、これだけのことをしたらこれだけの報酬が貰えるということもない。時が来たならばちゃんと花が咲き、そして黙って褒め

られても褒められなくてもすべきことをして黙って去つて行く。そういうのが実行であり、教えであり、真理だ。

「死生観について」(重い肺結核を約四年患つた時の心境から)

正岡子規の『病状六尺』という本には、「人間いつ死んでもいいと思うのが悟りと思つておつた。ところが間違いやつた。平気で生きておることが悟りやつたとある。分るか。平気で生きておつた。死ぬ時が来た。死んでもいいのやし、平気で生きておれる時は、平気で生きておつたらいいのや。」

### 「真似をする重要性について」

人間は真似をせないかん。学ぶということ。真似をするということから出ている。一日の真似をしたら一日の真似や。それですんでしまつたら、二日真似して。それで後真似せなんだら、それは二日の真似。ところが一生真似をしておつたら、真似がほんまもんや。

まさに宮崎老師の人生は、師を真似、道元禪師を真似、釈迦を真似られた一生そのものだったと思います。

二月一五日は、釈迦の入滅の日に因んで、遺徳を偲ぶ法要の涅槃会が各寺院で厳修されます。釈迦は亡くなる時、「何も嘆き悲しむな。

自分が亡き後は法を抛り所とせよ。．．．すべての事象は過ぎ去つて行くものである。怠ることなく修行を完成せよ」と言われました。

あらためて宮崎老師のご冥福を心からお祈り申し上げると共に、釈迦の法、道元の法を正念相続された宮崎老師の教え(法)を抛り所とし、その灯された誓願の火を更に高く掲げ、絶やすことなく、驀直(まくじき)に行じ続け、大きな火としていかねばと心を新たにしております。

最後に今年の歌会始の勅題「火」によせて、青山俊董老師(愛知専門尼僧堂堂長)が詠まれた歌を味読しながら筆を擱きます。

「今少し今少し高しかかげばや 君がともせし法(ノリ)のともしび」(「君」は釈尊のこと) 合掌 九拜

## 『口宣』——達磨図——と私

ふじみ野市 石田 七重

『口宣』がいつの間にか一〇号となりました。タイトルを書かせて頂く事になり、始めはどなたにもお読み頂く書体で、あまり漢字を崩さず書くことに務め、ルビを付けて書かせて頂いて居りました。二号目からは拙い仏画を入れて頂いて居りましたところ、平成一

七年六月の参禅会の折に、椎名ご老師より『禅の風』―特集（達磨）―という本を賜りました。

この本によって「達磨大師」についての歴史、逸話、達磨の図像の由来などについて、親しみ易く改めて認識することができました。又、『達磨図』には、禅宗の高僧、中国禅の祖師としての「頂相」と、禅を取り巻く文化、禅にまつわる逸話を描いた「禅機画」の二つに大別されるとありました。

「頂相」として描かれた作品としては、明兆筆「達磨図」や蘭溪道隆讚「達磨図」系の「岩窟の正面達磨」があり、後に描かれた作品の源泉になったと考えられています。

「禅機画」としての「達磨図」は達磨大師についての様々なエピソードの一つひとつが禅を志す人の「あるべき姿」を語っているそうです。

仏教書を読むことも大切だが、頭での理解に止まらず、それ以上に自分の生き方の中に具象化したものだと意識することです。

このご本には、「頂相形式」、「禅機画」としての達磨像の写真が沢山載っています。国立博物館蔵のものも多く、実物に接した作品も何点か載っています。その中の一点、南禅寺

所蔵の祥啓筆による「達磨図」の大師の眼光が、何となく「どうじゃ！お前さんも描いてみなされ！」と睨んでいるように思えたのです。厚かましいことです！。



又、この本から「日本禅画家協会」という所で学べることを知り、短期間ながら夢のうちにはダルマさんと睨めっことなりました。何より、上手・下手でなく、筆の穂先にかき気魄が込められるか！という点が気に入る

ました。これは精神的に坐禅や書道を学ぶ心と共通点のあることを感じました。

一日中毎日でも続けていたいという思いとは裏腹に、現実には時間不足・努力不足で、満足のいくものには当然ならぬままに、『口宣』八号、九号、一〇号に挿入させて頂きました。

『口宣』を作成されていらっしやる中寫氏が達磨大師の「面壁九歳」を『口宣』九号に重ねられて、九号にはことのほか思い入れが深いご様子でしたので、一九号の達磨さんの衣には朱を入れることにしました。

これを機にいつの日か自分と等身大の人間像である「達磨」を描きたい、そんな大それたことを心密かに温めてゆきたいと思っております。

―合掌―

## 小さな発見

千葉市 寺田 哲朗

昨年一二月の例会で清水さんに戴いた「招待券」で、銀座松屋で開催中の「小堀遠州（一五七九〜一六四七）展」に行ってきました。

茶道には縁のない私がどうして興味があったのかと申しますと、家内が昔習っていたお茶の流派が「遠州流」だったと聞いていたからです。

展示されているお茶の道具や掛け軸には、多くの人々が見入っていました。私には「猫に小判」、会場の一角で遠州の一生と業績を紹介したビデオを鑑賞していました。

それによりますと、遠州は茶道だけではなく、城の建築や庭園の造営にも才能を発揮し、最近では「日本のレオナルド・ダビンチ」とのニックネームがあるそうです。

また、禪を当時の大徳寺の春屋宗園（ちんげ）禪師に師事し、二八歳のとき「孤逢」、二九歳に「宗甫」、三二歳に「大有」の道号をいただいたとすることで、その時の記念にと宗園禪師が讃を書いた軸がありました。この頃の社会や禪の背景については、椎名先生の「禅宗史年表」（別冊太陽No三二・一九八〇・平凡社）を拝見しますといろいろな興味が湧いてきます。お茶は門外漢の私ですが、この展示会で小さな発見がありました。遠州が一八歳のころ、「水琴窟」を考案して、先生の織部をびっくりさせた、というのです。

この「水琴窟」とは庭園に甕を埋めて蓋をし、蓋の小さな穴から底に溜まった水に水滴が落ちると、甕の空洞で共鳴して「ポロロン」というような妙な幽かな音が聞かれるというもので、この音を名利名園で収録した

CDが市販されています。以前関心があつて都内のいくつかの庭園を廻って聴いたことがありましたが、これが遠州の発明だという説を初めて知りました。

この機会を戴いた道友の清水さんに、この文を借りて厚く御礼申し上げます。

## 年番幹事を終えて

鎌ヶ谷市 小山 斉

二月二三日の参禅会で年番幹事を終えました。この一年間、多くの人に教わりながら、どうにか年番幹事を勤め上げることが出来ました。有難うございました。

年番幹事として年間行事に積極的に参画することで、参禅会を維持していく上で、多くの人の下支えがあることを知りました。椎名老師のご指導をはじめとし、朝早くから参禅会を準備する人、『明珠』を編集・発行する人、『口宣』を編集・発行する人、老師の講話を発行する人、旅行を計画・実施する人、年間の諸々の行事を実行する人、典座さんを引き受けてくれる人、茶話会を進行してくれる人、後片付けをしてくれる人等、数え切れない人のお力添えがあつて、続けられていることを知りました。以前は月に一回参禅し、坐

禅を組んで帰る。何の疑問も無く過ごしていましたが、年番幹事をしたことで、参禅会が多くの人によって支えられていることを知り、また、その一員として自分がいることを強く自覚できた一年でした。

年番幹事を終わつても、年間行事や参禅会のお手伝いを積極的に行おうと思う、今日の頃です。

本年は杉浦さんと鈴木さんが、年番幹事を引き受けてくださいました。よろしくお願ひします。出来れば多くの方に年番幹事をお願いするべきでしたが、私どもの力がいたりませず、杉浦さんには平成一八年に引き続き一年置いて本年もお願いすることになり、恐縮しております。

## 年番幹事を終えて

我孫子市 小畑 二郎

昨年一年間、小山さんとともに、年番幹事を無事に務めさせていただきました。これもひとえに、椎名老師をはじめ、小畑代表幹事、杉浦さんなど、多くの方々のご指導によるものと、厚く感謝しております。

昨年一年間を振り返ってみれば、龍泉院参禅会に奉仕できましたことは、この上ない悦

びでした。たいしたことはできませんでしたが、諸先輩の教えに従って、新年会に始まり、毎月の参禅会、釈尊降誕会、一夜接心、歳末助け合いの募金活動、そして成道会まで、ほとんどすべての行事に参加させていただきました。夏の暑さや冬の寒さのため、つらいこともありましたが、それ以上に、これらの行事から教えていただいたことのほうが多く、幹事を引き受けてよかったと、つくづく実感しております。

私事にわたりませんが、昨年は、娘の結婚と出産（初孫）、これまでの研究成果を纏めた本の出版と、私自身にとっても大変忙しい年でした。このような縁に恵まれましたことも、参禅会と無関係ではないものと、勝手に得心しております。大悲殿においてありました「かおり四〇〇号」の表紙に書かれていました「信ずるといふ美徳をよそにして、幸福は成り立たない」という福田恒存の言葉に触れ、我が意を得た思いをしました。参禅する前でしたなら、きっとこのような言葉は私の頭を素通りしていったことでしょう。「信仰としての禅」を継続していったことが、このような言葉にも感じ入る我が身に育ててくれたと、深く感謝しております。

合掌

## 歳末助け合い托鉢

曹洞宗千葉第二教区では毎年一二月第三土曜日に、歳末助け合いのための托鉢を、柏駅東口のペダストリアンデッキで行っています。

今年も十二時半に柏市柏の長全寺へ道俗二五名が集合、龍泉院参禅会からも椎名老師および五名の会員が托鉢行に参加しました。

長全寺本堂前で般若心経一卷をお唱えした後、歳末助け合いの旗を立てながら、柏駅に向かいました。午後一時から、第二教区長である慈本寺の薄永俊明老師の指示の下、全員配置につくや、すぐにご住職さんたちは鈴を軽やかに鳴らしながら、低く静かに読経を始めました。

私たち参禅会の会員は、杉浦さんがお作りになられた浄財箱を胸につけて、行き交う人達に、恵まれない方への温かいご喜捨をお願いしました。

今年是非常にお天気がよく、暖かい日差しを浴びながらの托鉢でした。会員の石田さんや牧野さんも、わざわざご喜捨のために駆けつけてくれました。また、小さなお子様がお母様に勧められて、ご喜捨される微笑ましい姿も、今年も多く見受けられました。

夕方になり陽がビルに隠れるようになると、足下から急激に冷えてきて、身体が硬直してきましたが、つま先立ちするなどして、身体を少し動かしながら托鉢を続けました。

午後四時に無事托鉢は終了し、再び長全寺様に戻り、心づくしの温かいお饅頭をいただき、身も心も暖まりました。

集められた浄財は「光と愛の事業団」を通じて、能登半島沖地震被害者、中越沖地震被害者、恵まれない人々への救済にあてられます。なお、今回の歳末助け合い托鉢に関する記事が、翌日の読売新聞に二段組み写真付きで掲載されました。

## 大雪に見舞われた新年会

今年も二月三日（日）午後二時から柏市の「うどん市」で新年会が行われました。「うどん市」は、故・鎌田茂雄先生を講師としてお招きした参禅会発足二〇周年記念講演会の打ち上げを行ったお店で、当時は懐かしく思い出された方もいらっしゃいました。

新年会当日は未明から降り出した雪が数センチ積もり、足下が危ない状況だったにもかかわらず、二二名の方が参加されました。

中嶋さんによる乾杯のご発声で新年会が始



まり、暫し歓談の後、恒例になった各自からの所信表明発表が行われました。月例参禅会の茶話会では、時間の関係上禅に対する思いなどを充分に語る事ができませんが、新年会の席では皆さんそれぞれに、日頃考えられていることや参禅会への思いの丈を、十二分に吐露されていらっしやいました。

長時間にわたるこの新年会恒例の独演会(?)を通じて、お互いの理解が深まり、会員間の絆が強まっているのではないかと思います。また、最近会員になられた方からは、新年会で皆様のお名前をやつと憶えることができたとの声もお聞きました。

ご老師は当日、ご都合が悪くご欠席になられました。そのためか皆さんお酒が進むほどに宴席は大いに盛り上がり、三時間の新年会はあつという間にお開きとなりました。しかし、まだ語りつくせない方たちは二次会へ席を移し、さらに大いに語り合ったそうです。新年会の席上、ご老師からご提唱いただいている『正法眼蔵』について、「弁道話」と「現成公案」の巻を再度お願いしたいとの要請がありました。小畑代表幹事から「参禅会発足四〇周年に当たる三年後にお願ひしてはどうか」とのお考えが示されました。

## 喚鐘が新しくなりました

皆さん止静の鐘の音色が変わったことにお気づきでしょうか。一月の参禅会の時から喚鐘が新しくなったのです。「響銅十二稜喚鐘」と名づけられた喚鐘の製作は、足利市に在住しておられた仏具商の鶴田力(ときたつとむ)さんで、日本伝統工芸展に出品され、何度も入選されたそうです。

この喚鐘は一〇ヶ所にわたって象嵌の細工が施されており、大変素晴らしい工芸品です。一度近くでご覧下さい。

## 早春の涅槃会

去る二月一五日午後一時より、龍泉院様において、一三名の梅花講員と六名の参禅会員が参列させていただいて、涅槃会が厳肅に執り行われました。涅槃会とはお釈迦様が亡くなられた二月一五日(旧曆)に、報恩追慕の趣旨で行われる特別な法要です。

龍泉院梅花講の皆さんによって大聖釈迦如来涅槃御和讃と大聖釈迦如来涅槃御詠歌が朗々と唱えられ、法要の幕が開き、椎名老師の指導のもとに肅々と法要が行われました。

法要の後、椎名老師より以下のようなご法

話を賜りました。

二月一五日は釈尊の亡くなられたお涅槃(入滅)の日で、仏教者にとっては親の命日に深い意味のある日です。当寺においても二月一日から一五日までの間、本堂に涅槃図をかけて供養をしています。

釈尊は八〇歳でお亡くなりになりました。亡くなられる直前に最後の説法をなされましたが、沢山集まった弟子たちは皆嘆き悲しみ、そして大自然を灯にして生きなさいとポツリポツリと述べられました。様々なことを自然から沢山教えられるという事は分りますが、「自分を灯にして」というところがなかなか分りにくい。

これは自分の醜い心を灯にするのではなく、心の奥深くに自然に備わった仏の心を見出すことなのです。だてに年をとつてはいけなく、年とともにそういうものが膨らみ豊かに発揮されなくてはいけないと言うことです。

最後に、龍泉院様より無病息災に過ごせるという涅槃団子を参加者全員に頂戴しました。涅槃会が過ぎるともう春はすぐそこに来ている。桜に浮かれて仏の心を見失うことのないようにしたいものです。

## 会員便り

昨年末より龍泉院参禅会のホームページ作成に取り組んでおり、四月八日に立ち上げる予定で準備しています。それに伴い、参禅会の時にご覧いただけるよう、龍泉院様でパソコンを大悲殿に一台ご用意くださることにいたしました。大変有難いことです。

また、現在『明珠』編集部のご案内がホームページの作成にも

当たっていますが、若い方々のご支援やご協力を頂きたいと思っておりますので、ITに詳しい方やそうでない方でもお声をかけてください。お待ちしております。

## 沼南雑記

参禅会記録( )内は座談の司会者  
平成一九年

●九月三〇日 二九名

(鈴木民雄氏)

## 龍泉院参禅会簡介

一、日時 毎月第四日曜九時より(初参加の方は八時半まで

に來山のこと)、四月は八時半より坐禅作法指導

一、坐禅 第一炷 口宣、坐禅三〇分

経行 一〇分

一、講義 第二炷 坐禅三〇分

木版三通、開経偈を唱え、椎名宏雄老師より『正

法眼蔵』の提唱を聞く。一月より「春秋」の巻

自己紹介の後、茶を喫し座談。正午解散

一、参加資格 年齢、性別を問わず、どなたでも参加できます

一、会費 無料

一、一夜接心 六月上旬(本年は六月七・八日)一泊し、七炷の

坐禅とご提唱を聞く

一、成道会坐禅 月例参禅会の外に、毎年一二月の第一あるいは

第二日曜(本年は一二月七日)、积尊成道を讃えて

坐禅、成道会法要後、法話を聴聞、点心を共に

する

●一〇月二八日 三五名

(根本 保氏)

●十一月二五日 三三名

(軍地恒四郎氏)

●一二月二日 参禅会二九名

成道会 梅花講一一名

於 天徳山龍泉院

幹事 小山 斉氏

小畑 二郎氏

●一二月一五日

歳末助け合い托鉢

於 柏駅東口

曹洞宗千葉第二教区主催

椎名老師及び会員五名

●一二月二三日 三一名

(大坂 晶子氏)

坐禅・禅講後、大掃除

平成二〇年

●一月二七日 三六名

(美川 恒子氏)

●二月三日

新年会 一二名

於 柏市「うどん市」

幹事 杉浦上太郎氏

鈴木 民雄氏

●二月一五日 参禅会 六名

涅槃会 梅花講一三名

於 天徳山龍泉院

幹事 杉浦上太郎氏

●二月二四日 二九名

(相澤 善彦氏)

▼地球温暖化が進んでいるが、今年のはこの数年の内では寒さが最も厳しかった。寒さが厳しいほど真の冬を実感でき、また春を待つ気持ちが湧いてきます。これが正常な自然の有様だと思います。

▼永平寺第三祖で大乘寺ご開祖の徹通義介禅師七〇〇回御遠忌法要が、一〇月一日(土)から一四日(火)金沢・大乘寺で催されます。季節もよいころですから、義介禅師を偲んで北陸路を散策されるのは如何でしょうか。

▼次号は創刊五〇号の記念号となります。記念号のテーマ作りをこれから始めますが、皆さんからのテーマをお待ちしています(秀嗣)

▼去年の暮に引越しました。「もったいない」と何年も仕舞ったままにして使わないものが結構出てきました。如何に不要なものを買ったり、貰ったりしているかです。本当に「もったいない」。 (昌徳)

▼家庭における地球温暖化貢献が少ないと、方々でCO<sub>2</sub>削減キャンペーンを行っています。私ごとですが二月から柏迄車を止め、バス通勤に変えました。それによるCO<sub>2</sub>削減量は毎日二〇〇kg、年間約五七tにもなり、この量は家庭全体の約一五%削減で、京都議定書の六%目標値を超えます。 (隆道)

●発行/天徳山龍泉院 千葉県柏市泉81 04(7191)1609  
●印刷/岡田印刷株式会社 柏市高田1116-45 04(7143)3131